

礼 拜 堂

ウイリアム・フィードリング・オグバインという人がいます。もう既に故人になりましたが、アメリカの社会学者でありまして、有名な『ズレの理論』を提唱した人であります。

いまから四四年前、一九二三年に『社会変動論』というこじんまりした本を書きました。まことに文章は平明で、そのうえに論旨は実証的であります。この本はアメリカの社会学の古典の一つに数えられていますが、私はこの本を通して、この人から大変教えられるところが多かったのであります。

『社会変動』という本の中には、「ズレの理論」を例証するいくつかの事例が記されています。その中の一つとして、アメリカの森林はいつ頃から乱伐されはじめたであろうか。そして、乱伐の弊に気がついて、森林資源を愛護しなければならぬという政策は、いつ頃から打ち出されたであろうか、という問題を投げかけています。

オグバイン先生のいうところによると開拓の当初、アメリカのはしかつたものは森林ではなくて耕地、燃料ではなくて食糧であり、また、工業の勃興に当って森林はむしろ開発を妨げる障害でありました。

したがって、森林は容赦なく切りひらかれて行きました。たとえば、アメリカカナダの国境地帯や、メキシコ湾にのぞむ地帯や東部のアパラチヤ地帯などは、森林の乱伐の弊がはなはだしかった地帯であります。

ところで、森林の乱伐の弊はいつ頃からはじまったかといえますと、その初期は、少なくとも一八六一年（南北戦争）以前ではなかったというのであります。

この時点をたしかめるために、(1)アメリカの総人口、(2)人口八、〇〇〇以上の都市人口の比率、(3)鉄道敷設のマイル数、(4)鉄鉄の生産量、(5)石炭生産量など五つの指標を選定し、それぞれについて、累年の推移の跡を見たのであります。

そうすると、五つの指標がそろって著るしく増大する年次は、一八六一年以前ではないということがわかり、この年次が工業が進展しはじめた年次であり、したがって、森林乱伐の弊がはなはだしくなりはじめた年次である、と推定したのであります。

ところで、森林の乱伐の弊を警告したり、森林の愛護を啓蒙したりすることは多くの人々によってなされ、またしばしば新聞や雑誌によって取上げられました。が、しかし、アメリカの国是として、具

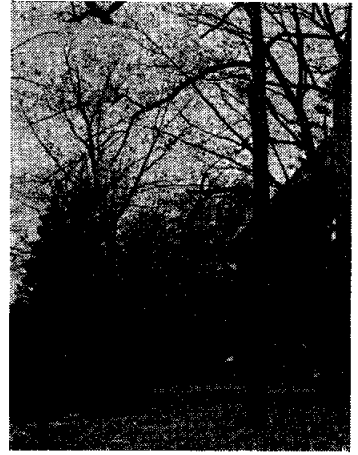
体的に森林愛護の政策を打ち出したのはいつだろうか、ということが問われるのであります。オグバイン先生は、それは少くとも一九〇四以前ではなかった、と断定します。

なぜかという、一九〇四年には、ルーズベルト大統領によって、はじめて第一回自然資源保護会議が招集され、森林地帯の立入禁止や森林保護の通達が発せられたからであります。そこで、森林乱伐の弊がはじまった一八六一年と、森林乱伐の弊に対して、自然資源保護の政策が打ち出されるようになった一九〇四年との間には、約四〇年というズレがあるのであります。

言葉をかえていいますと、物質文化とよばれるところの森林乱伐の現象は、その弊害に気がつくこと四〇年以前にはじまり、順応文化とよばれる森林愛護の政策は、四〇年以後になってようやく打ち出されたのであります。だから、この四〇年のズレを、できるだけ縮めることが大切であって、そのことを担当するのが教育であり啓蒙である、ということになるのであります。

しかし、オグバイン先生は社会学者であって教育学者でありませんから、四〇年のズレを縮める教育や啓蒙の方法につ

森林保護と教育



いて、詳しく論じ立てることはしませんでした。社会が変動する常道は、遺憾ながら、森林の乱伐といったような物質文化が先行し、森林愛護といったような順応文化はいつもおくられて後手になる、ということを実証するに止まったのであります。

□

私は、最初は昭和四年から五年間、二度目は敗戦後今日まで、遠軽という町の山の中の教育農場に住みつきました。昭和四年から五年間、私は、教育農場附属の小作農場を経営管理しました。秋になると、小作科の取り立てに歩きましたが取り立てに歩きながら、小作制度の廃止を思いました。

やがて小作農場は廃止されることになりましたが、廃止に当って小作農家の一戸一戸に、薪炭林を一町歩ずつつけて解放しました。当時、農家の人々は、また薪炭林の値打を高く評価しなかつたようでありましたが、この頃は造林熱が高まりました。殊に離農者や兼業農家は、離農するとき、また兼業しながら、耕地をつぶして造林するものが多くなりました。

もともと、私たちの教育農場は山林を大切に管理しています。風致林五〇町歩を除き、残りの四〇〇町歩のうち一〇〇

町歩は、既にカラマツやトドマツの植林を完了しました。そして、三〇〇町歩の天然林は、太く短かく、団地造林に踏切る計画を立てています。模範民有林を育てることが、私たちの夢だからであります。

教育農場の中央に、標高三四〇メートルの平和山というおだやかな小山があります。いまから四〇年前、この山は山頂から山麓まで禿山で、草原におおわれていました。どうかしてこの禿山に、樹木を生い茂らせたものだと思願しましたが四十年たった今日では、植林した針葉樹は高々と伸びて、全山をおおうようになりました。

教育農場の一角に、小高い丘があります。私たちはこの丘を「望の岡」とよんでいます。アメリカの西部によく見かける、素朴な礼拝堂が建っています。私たちは、ゆくゆくこの丘を、植物園に仕立てたいと考えています。

営林署のいうところによると、この附近の樹種は四二種類だといいますが、少なくともそのすべての樹種をこの丘に移植して、地域特有の植物園をつくりたいものだと考えています。植物園ができれば、そこに野鳥を寄せ集めたいと考えます。この附近に集まる野鳥の種

類は、五〇種類から六〇種類だといわれますから、そのすべてを植物園の森に集めて小鳥の森をつくりたいと考えます。従来も、三〇〇個から四〇〇個の巣箱をかけましたが、この丘の小鳥の森には、なお巣箱の数をふやして、野鳥を寄せ集めたいと考えています。

いまから一五、六年前に、教育農場の中央に、林道の幹線をつくりました。総工事費は九〇万円かかりましたが、いまになってみると、造林と搬出とは大変便利になりました。ゆくゆくはこの幹線に沿って、枝道を張りめぐらして、造林と搬出とを一層容易にしたいものだと考えています。

以上は、私たちが森林を愛護する一端を申しのべたのでありますが、なぜそのように森林を愛護するかということについて、その理由を説明しなければなりません。

私たちの教育農場はいまから四四年前大正三年に、財団法人家庭学校の分校として創設されました。本校は東京にあって、分校より十五年早く、明治三十三年に創設されました。創設者は、亡父・留岡幸助であります。亡父は、非行少年の教化を目的として、家庭学校を創設しましたが、創立以来一五年の、東京におけ

る教育成果を反省しますと、非行少年の教化は、東京のような都会ではなく、もっと広大な自然の要素の豊かなところで行なわれなければならない。そう考えて一千町歩の原始林を北海道遠軽町の山の中に求めたのであります。

亡父は大正十三年、「自然と児童の教養」という本を書きましたが、それは北海道の教育農場の創立満十周年を記念して、自然と教育についての考えを披瀝したものであります。その中に、次のような一節があります。

『現今の社会状態は自然と人間の結合全く破れ、生活の状態愈々不健全にして人の精力の漸く消耗し行くを自警するのであるが、この不幸なる状態より人間を救い出すのは、再び元の自然へ人間を結びつけることなのである。

西洋の宗教即ち *Religion* なる語は『再び結び付ける』と云ふ意義であつて、元々人間は幸福な状態に造られたのであるが、罪悪を犯し神から遠ざかった理由によって彷徨ふたものとなった。この神から遠ざかると云ふことが、即ち人間の墮落である。故に迷ひ出たる人間を再び救ひあげると云ふことは、その遠ざかった人間を元の神に結びつけることである。

……而して自然を離れた状態の最も甚しきものが、今日の所謂都市生活と云ふものだ。不良少年の発生は即ち都市生活より来る一つの弊害たる現象に過ぎないのであるから、之を改良するには其児童を自然の懷に入れて育て上げることで、之が家庭学校の主張であり……開かれた所以である。』

□

教育は、自然環境の中で行なわれなければなりません。なによりも広大な土地をもたなければなりません。そこには、丘があり、谷があり、小川があつて、森林が鬱蒼と生い茂り、耕地が広々とひろがり、家畜が悠々と草を食んでいなければなりません。自然に働きかけて、生産し、消費する生活の尊さを学びとるために、そのことは絶対に必要な条件であります。

しかし、森林は、偶然に生い茂るものではありません。耕地は、やすやすと耕作されるものではありません。家畜は、決して無事に育つものではありません。心身を勞し、確實迅速に、創意工夫をこらして、自然に挑み、自然を征服しなければならぬのであります。

言いかえれば、教育に必要な自然環境は決して自然にあるものではなく、人が

精を出して作りあげるものであります。「土地は人を化し、人は土地を化す」といった人がいますが、そのことはこのことを意味するのであります。

教育は、環境の中で行なわれますが、環境には二つの種類があります。その一つは、鬱蒼と生い茂る森林とか、広々とひろがる耕地とか、悠々と草を食む家畜とかのように、普通自然環境といわれるものです。もう一つは、自然に働きかけ自然を征服する過程において、人々は苦勞をともし、知恵を出し合い、仕事を分担し合つて、人間関係をりつく出します。この人間関係は、集団規範ともいわれ、気風ともいわれますが、これこそ、自然環境に劣らない大切な環境であります。

一口に「自然保護と教育」といいますが、これも、そこには、自然環境と人間関係を区別して、自然に働きかける人間の働き方に注目しなければならぬ、と思うのであります。

(遠軽町・北海道家庭学校長)